

溝上慎一の教育論(動画チャンネル) No268

(新著の紹介)

主体的な学びが成立するための条件の探求

竹内謙彰先生(立命館大学名誉教授)

溝上 慎一 Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 教授

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問
東京大学大学院教育学研究科 客員教授

<http://smizok.net/>
E-mail mizokami@toin.ac.jp

【プロフィール】1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、講師、准教授、2014年教授を経て2018年に桐蔭学園へ。桐蔭横浜大学学長(2020-2021年)。京都大学博士(教育学)。

*詳しくはスライド最後をご覧ください

※本動画チャンネルは溝上が個人的に作成・提供するものです。

※公益財団法人電通育英会の助成を受けて行われています。

※本動画では字幕を付けていませんので、必要な方は「設定」で「字幕オン」にしてご利用ください。

(ご紹介)



竹内 謙彰

たけうち よしあき

立命館大学名誉教授

京都府生まれ。京都大学大学院教育学研究科博士後期課程満期退学。京都大学博士（教育学）

愛知教育大学勤務を経て、立命館大学産業社会学部教授に。2024年3月末定年退職
専門は、発達心理学、教育心理学。

(主な著書)

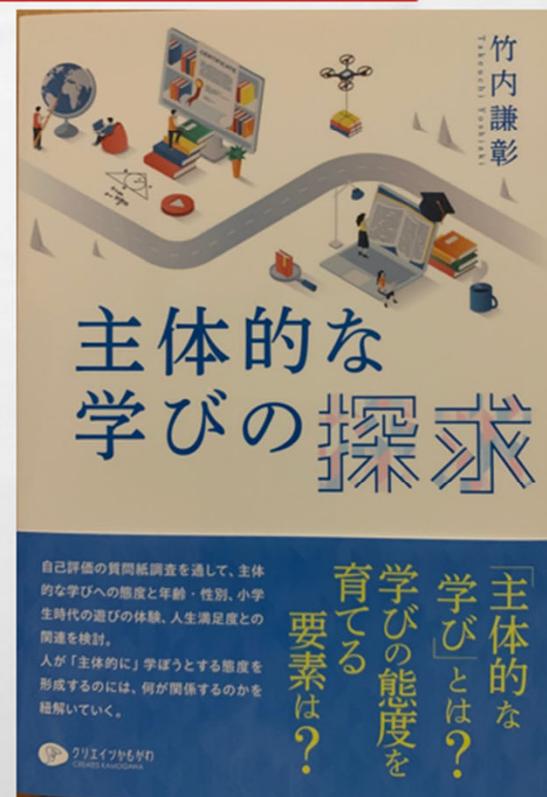
- ・ハヴァースカ,K.他(著), 竹内謙彰・荒木穂積(監訳)
(2010). 乳幼児期の自閉症スペクトラム障害—診断・アセスメント・療育— クリエイツかもがわ
- ・竹内謙彰(編著)(1998). 空間認知の発達・個人差・性差と環境要因 — 風間書房



目次

文献：竹内謙彰（2024）『主体的な学びの探求』 クリエイツかもがわ.

- 背景と課題
- 主体的な学びとは何か
 - 文部科学省の提起とそれに対する批判的検討
 - 大学教育における主体的な学びに関わる近年の議論
- 主体的な学びが成立していると考えられる事例から学ぶ
 - ワークショップ / サドベリー・バレー校
- まとめ
 - 主体的な学びとは何か
 - 主体的学びが実現するための条件



それではご覧ください

主体的な学びが成立する ための条件の探求

1

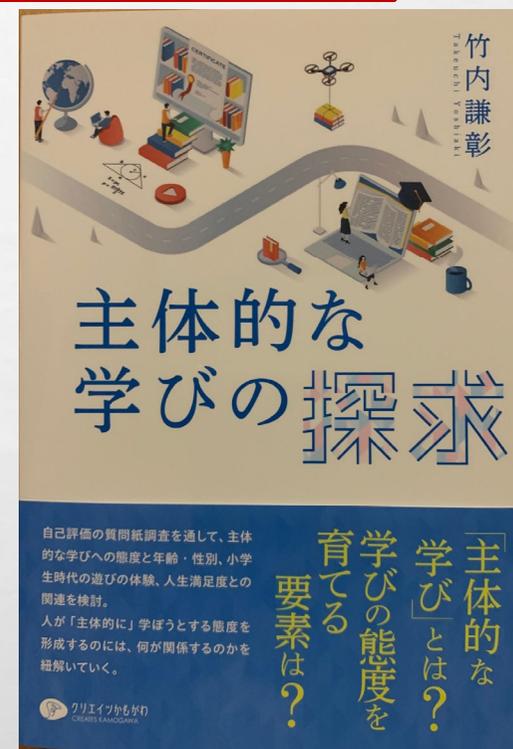
★ 2024/5/15

竹内謙彰

目次

- 背景と課題
- 主体的な学びとは何か
 - 文部科学省の提起とそれに対する批判的検討
 - 大学教育における主体的な学びに関わる近年の議論
- 主体的な学びが成立していると考えられる事例から学ぶ
 - ワークショップ / サドベリー・バレー校
- まとめ
 - 主体的な学びとは何か
 - 主体的学びが実現するための条件

文献：竹内謙彰（2024）『主体的な学びの探求』 クリエイツかもがわ。



背景と課題

〔背景〕

- なぜ、「主体的な学び」の研究なのか
 1. ともすれば学びに対して受け身な姿勢になりがち大学生が多いことへの気がかり
 2. 文部科学省による「アクティブ・ラーニング」あるいは「主体的、対話的で深い学び」の提起への期待と懸念
 3. 子どものころからの素朴な疑問「なぜ学校に行って勉強しなければならないのか」

背景と課題

〔課題〕

1. 主体的な学びとは何かを明らかにする
 - 文部科学省の提起の批判的検討
 - 近年の主体的な学びに対する議論の概観と整理
 - それらの作業を通じて、主体的な学びと呼びうるものの特徴を整理するとともに、主体的な学びとはいかにあるべきか、またいかにあるべきではないかを明らかにする
2. 主体的な学びを実現するための条件を明らかにする
 - そのために、現実に行われていて、学び手の主体的な学びが十分成立しうる条件を備えていると考えられる実践について検討する

文部科学省の提起とその批判的検討

〔文部科学省の提起〕

- いわゆる「質的転換答申」（2012年8月の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」）において、従来の一方向的な講義形式の教育とは異なる学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称としてアクティブ・ラーニングの語が用いられた。
- ⇒やがて、アクティブ・ラーニングは、大学のみならず日本の学校教育改革の全体に関わるキーワードに
- 歓迎とともに批判も・・・活動重視の方法論に収れんすることへの批判⇒用語の変化：「アクティブ・ラーニング」から、「主体的・対話的で深い学び」へ

教育や学びの「方法」から授業改善の総合的な「視点」へ

2024/5/15

文部科学省の提起とその批判的検討

- 〔批判的検討①〕 田上(2016)による教育方法学的立脚点から
- 「質的転換答申」(以下、「答申」)(2012年8月)以降のアクティブ・ラーニングの提起に対しての批判
- 学習指導要領では、従来、教育内容についての詳細な規定はなされても教育方法についての踏み込んだ言及はされてこなかったにもかかわらず、「答申」は教育方法に踏み込んでいる。「教育の方法が学習指導要領で言及された場合、原理的には教師はその教育方法を意識して使用せざるを得ない」(田上, 2016, P. 13)⇒アクティブ・ラーニングを行うことそのものが目的化してしまうことへの警鐘
- 問題点「授業の定式化や固定化と、それに順応する態度を教師と子どもに求めること」

教育や学びの「方法」から授業改善の総合的な「視点」へと表現は変わったが、教育方法の相対化までは目指されていない

文部科学省の提起とその批判的検討

- 〔批判的検討②〕小針(2018)による教育史的観点からの検討
- 実践上の問題：「アクティブラーニング」や「主体的・対話的で深い学び」が導入されることで恩恵を受けやすいのは、元々学力が高い層であり、導入で学力格差を助長する可能性がある。
- 運用上の課題：学習者の能動性を引き出すと評価を受けた教育実践が、一面では定型化の問題を孕んでいた問題が、すでに近代教育史においても見られた。現代でも、現場からの「型」への希求は生じがちで、それが定型化や固定化をもたらす可能性がある。
- 倫理上の課題：①アクティブラーニング実現の難しさ、②教師の高い力量の必要性、③アクティブラーニングの限界設定←与えられた枠組みを学習者が超えようとしたとき、④学びの意欲の格差

アクティブラーニングの持つ政治性への指摘も…主体性や自主性の涵養を都合のよい歴史観や社会間、道徳観の習得に結び付けて利用される危険性

2024/5/15

大学教育における主体的な学び に関わる近年の議論

- 溝上(2014)によるアクティブラーニング論
- アクティブラーニングの定義:「一方向的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」(溝上, 2014, P.7)
- 何にポジショニングするかで二つのレベルを想定:「受動的な学び」に少しでも能動的な要素を増やすレベルと、「能動的な学び」が主となるレベル。
- なぜ、大学教育においてアクティブラーニングなのか:[理由1]米国に端を発する大学の大量化により生じた高等教育の困難への対処の必要性から「どのように教えるか」が課題に、[理由2]変化の激しい現代社会に適応するため⇒特に、情報・知識リテラシーの獲得に向けて

大学教育における主体的な学びに関わる近年の議論

- 松下(2015)のディープ・アクティブラーニングの考え方
- 「大学での学習は単にアクティブであるだけでなく、ディープでもあるべきだ」(松下, 2015, P.1)
- アクティブラーニングを導入しても未解決な問題: ①知識(内容)と活動の乖離、②能動的な学習をめざす授業がもたらす受動性、③学習スタイルの多様性への対応 ⇒ ディープ・アクティブラーニングは、特に①の問題を中心に、アクティブラーニングを再構築することをめざす。
- 三つの深さ: 深い学び、深い理解、深い関与 ⇒ 特に「深い関与」は重要な概念
- 関与は、アクティブラーニングと動機づけの相互作用によって生み出されるもの: ポイント1⇒動機づけの主題化、情意面への着目、ポイント2⇒アクティブラーニングの焦点は身体的よりもむしろ知的に活発であること

大学教育における主体的な学びに関わる 近年の議論

- アクティブ・ラーニングと民主主義：渡部(2020)の捉え方
- アクティブ・ラーニングはこれからの日本の民主主義の在り方に関わっていると主張
- 民主主義の3要素：「思想」「制度」「手続きと運用」⇒アクティブ・ラーニングは、とりわけ「手続きと運用」に関わる
- 渡部(2020)の主張：学習者は、①プロジェクトの運営に参画、②チームの活動への貢献、③視野の広がり、④コミュニケーションの大切さへの気づき、⑤自己の特質への気づき、と言った豊かな学びの経験を達成感を伴って成し遂げ、自立的学習者として成長し自律的市民となりうる。
- 「若者たちが、繰り返しリサーチワークに取り組むことで、知の更新の仕方はもちろん、知の枠組みそのものを問い直す批判的理性を獲得していくことになるし、同様に、グループワークへの参加を重ねることで、合意形成など社会性の獲得にもつながる構造になっている」(渡部, 2020, PP.184-185)

主体的な学びが成立していると考えられる事例から学ぶ

- [ワークショップ]: ワークショップとは、「先生や講師から一方的に話を聞くのではなく、参加者が主体的に論議に参加したり、言葉だけでなくからだや場所をつかって体験したり、相互に刺激し学び合う、グループによる学びと創造の技法」(中野, 2001, P.II) ⇒ 3つのキーワード: 参加、体験、グループ
- 参加: ワークショップでは、双方向型の「参加型」の学びが強調される。しかし、参加は強制ではない。やりたくないことも含めて、当人の「主体性」が尊重される。また、参加には、当人の言動によって場を動かすことを知るという意味も含まれる。
- 体験: 学習は、通常、知識の獲得や知識のはたらきと捉えられがちだが、ワークショップでは、知性だけでなく、からだを使い、時には感情にふれたり直観や霊性をも動員したりする、ホリスティックな学びという特徴を持つ。
- グループ: 集団での相互作用での学び合い。安心して成長したり生まれ変わったりできるゆりかご。

主体的な学びが成立していると考えられる事例から学ぶ

- [サドベリー・バレー校]: 米国マサチューセッツ州にあるデモクラティック・スクール。1968年、元コロンビア大学教員のダニエル・グリーンバーグらによって創立された。
- 19世紀に建てられた邸宅と10エーカーの敷地(およそ200メートル四方)が校地。4歳~19歳の子ども130~190人が通う。スタッフは9~11人。
- 同校の主要な決定機関は、週1回開かれる全校集会であり、メンバーである子どもスタッフも、各自1票の議決権を持って参加。学校運営に関わる主な事項はすべてここで扱われる。
- 同校には、カリキュラムも時間割もない。当然、決まった授業時間もない。ただし、子どもが希望すれば、スタッフや外部の人が講師となって、希望者に対して授業がなされることがある。また、専門的な知識を得ることを希望したり、特別な技能を得たい場合には、外部の専門家に弟子入りするなどの措置がとられる。
- 「卒業」後、大学等に進学したり、働き出したりした人の多くが、自分の希望に沿った活動、生活をしていることが、何度かの追跡調査で明らかにされている。

とても興味深い「学校」実践だが、形式的なところを真似るだけではうまくいかないように思われる。ここでの質の高い学びを補償する「仕掛け」は、もっと探してみる価値があるのではないか。

12

2024/5/15

まとめ

- 主体的な学びとは何か
- 3つのレベルに分けての理解: 溝上(2014)の提起する2つのポジショニングをふまえて⇒
 - 第1のレベル: 従来の講義型の授業のような「受動的な学び」に少しでも「能動的な学び」の要素が付け加わるレベル
 - 第2のレベル: 学びが能動的であることが常態化した学びの状態
 - 第3のレベル: 第1、第2のレベルが既存の教育システムを前提とするものに対して、それを超えたところに生じる学びのレベル。自由な選択による高いモチベーションに基づく学びのレベル
- どのようなものであるべきか: 学び方を相対化する回路があること、学びの到達に対する社会の許容性があること、民主的な社会の主権者を育成する観点があること

主体的な学びを3つのレベルで理解する考え方は、既に溝上(2018)が精緻な理論化を伴って提案していたことを付け加えておきたい。

まとめ

- 主体的な学びが実現するための条件
- すべてのレベルに共通するのは、学びへのモチベーション
- 第3のレベルでは、学びは本人の選択によるものであるため、モチベーションは維持されやすい。学びへの責任と自律をもたらす。集団としての意思決定の経験は他者からの学びを容易にする。
- 第2、第1のレベルでは、教育の諸条件が重要な役割を果たす。その中でも教員は重要な役割を果たす。それと同時に、教育のシステムや運用も重要 ⇒ 注意点:①能動性や積極性を涵養することをめざす教育実践も定型化や固定化により、かえって学習者を受け身にしてしまう可能性もある。②学びの技法と学び手とのマッチング
- 第3のレベルがいかなるものかについての検討は今後の課題。

文献

- 小針誠(2018)『アクティブラーニングー学校教育の理想と現実』講談社
- 松下佳代(2015)「ディープ・アクティブラーニングへの誘い」松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター(編著)『ディープ・アクティブラーニングー大学授業を深化させるために』勁草書房. Pp.1-27.
- 溝上慎一(2014)『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂
- 溝上慎一(2018)『学習とパーソナリティー「あの子はおとなしいけど成績はいいんですよ！」をどう見るか(学びと成長の講話シリーズ2)』東信堂
- 文部科学省(2012)「未来を創出する大学教育の構築に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申案)」
<https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/_icsFiles/afieldfile/2012/08/14/1324511_1.pdf> (2020年5月9日閲覧)
- 田上哲(2016)「教育方法学的立脚点からみたアクティブ・ラーニング」日本教育方法学会(編)『教育方法45 アクティブ・ラーニングの教育方法学的検討』東京：図書文化社 Pp.10-23.
- 渡部淳(2020)『アクティブ・ラーニングとは何か』東京：岩波書店